

3. 土器片の移動について

本年度の調査では、できる限り遺物の出土位置を記録し、それをもとにして土器の接合関係、同一個体の土器片の分布状態を把握することを目標とした。この作業により、遺跡の性格を考えるための資料が見出されると考えたからである。

D地区では、縄文早期の住居跡9、ピット7、焼土2が検出されており、Ⅵ章の小括で述べられているような、集落の再構成がなされている。そのためには1つ1つの遺構の時期を決定することが、重要ポイントであった、ところが、ほとんどの遺構において確実に時期を決定できるだけの資料は少なく、多くの場合床面または覆土の下位から出土するわずかの土器片にたよらざるを得なかった、そのためこれらの遺物の出土状態を検討し、遺構の時期を推定したわけであるが、この作業にあたって、土器の接合関係と同一個体の破片の分布を知ることが決め手となった。ここでは、遺物取り扱いの概要について簡単に述べてみたい。

1) DH-7出土土器の分析

DH-7は、沢の北側における住居跡群のうち最も高い位置にあり、降下軽石層下の覆土や床面近くから数多くの遺物が出土している。この住居跡の土器について出土状況を点検したところ、(1) 数量が多いにもかかわらず、住居使用時の土器がそのままの形で残されていない、(2) 住居跡内出土と同一個体の土器片が沢の北側一帯に広く分布している、という2つの特徴を知ることができた。

(1)については、I b-1類土器が住居跡より高い位置にある破片と接合関係があること、出土状態が個体ごとにまとまっておらず(図Ⅵ-19)、流れ込みの礫の間から出土するものがあることから、床面がほとんど埋まらないうちに、高い位置から土器が流れ込んだと推定される。また、唯一まとまって出土したI b-2類土器(図Ⅵ-18-12)についても、I b-1類土器片よりやや高位にあることから、住居跡の廃絶時と直接関係するものではなく、住居跡の埋没過程で、まとまって投棄されたものと考えるのが妥当であろう。

(2)については、図1に示したとおりである。たとえば、図Ⅵ-18-1の土器は、底部がほぼ床面から、また胴部片が床面直上から出土しているのに、その間をつなぐ胴下半部の破片は、40m近く離れたY-88-aからみつまっている。この他同一個体の破片は、W-88-b、DP-4とDH-3覆土、住居跡より高い位置にあるU-86-aなどから出土している。また、3や9と同じ個体の破片も、DH-3、DH-5の覆土等にみられる。このように広い分布がみられるのは、I b-1類土器がDH-7に流れ込んだ際に、住居跡の周辺にも散乱し、それが傾斜に沿って移動したためであろう。Y-88-aから出土した土器片は、磨耗がはげしく、水による長距離移動の痕跡がみとめられる。

2) 地形と土器片の移動との関係

図1は、D地区における同一個体の土器の分布を示したものである。これによると、沢の北側では、傾斜に沿って西から東へという土器片の動きを認めることができる。

I b-1 類の土器は、その大半がDH-7にまとまっており、東側の遺構密集地区ではほとんどまとまった分布を示さず、復原可能なものも見当たらない。現在では包含層の残存状態がよくないのではっきりしないが、I b-1 類土器は本来DH-7周辺の高い位置にあり、それが時間とともに全域に拡散していったものと推察される。

この移動がおきた時期については、DH-7の例からみて、I b-1 期であると考えられるが、これを補う証拠がDP-3とDP-4にみることができる。DP-4では、覆土下部にI b-1 類、覆土上部にI b-3 類とはっきりわかれて土器片が出土している。このI b-1 類中には、DH-7の1と接合した破片が含まれている。一方、DP-3には周囲にI b-2、I b-3 類土器片が多いのに、覆土中からはI b-1 類土器のみが出土している。低い位置にあるため早い時期に埋没したのであろう。わずかな例ではあるが、I b-1 類土器の頃の埋没が一気に行なわれ、次の堆積まで時間差があったことを示すものといえよう。これに対して、遺構の覆土、床面から出土するI b-1 類は、I b-2、3 類と混在して出土している。住居が構築された時に掘り上げられ、廃絶後埋没した土に含まれたのであろう。

I b-2、3 類土器は、遺構の集中地区にまとまって分布している。この時期の土器片も西から東へ傾斜に沿った動きが認められ、DH-5周辺の低い部分には、磨耗した各時期の土器片がまとまって出土している。主として水の営力により移動したものであろう。ただ、I b-

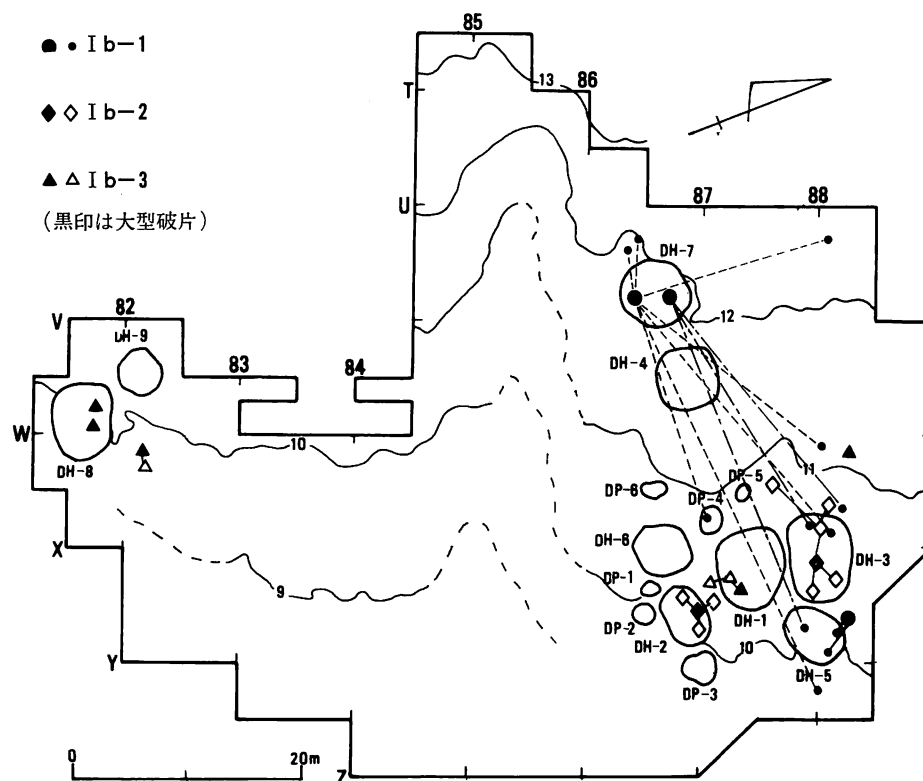


図1：D地区における同一個体土器片の分布

1 類の動きほど大きくないことと、遺構内から大型の破片にまとまる資料が出土することがこの時期の特色である。

3) 遺構内における遺物の出土状態

今まで述べてきた、遺跡全域における遺物の大きな動きは、個々の遺構における遺物出土状態とどのように関連するのだろうか。遺構の時期決定と関連させて考えていきたい。

遺構内から出土する土器の状態は、大きく次の3つに区分することができる。

- (1) 完形に近い土器が、そのままつぶれたような状態で出土するもの
- (2) 大形の破片にまとまる状態で出土するもの
- (3) 小片となって出土するもの

住居跡の時期決定には、(1)が一番比重が重くつづいて(2)(3)となっていく。

(1)の状態では床面から土器が出土するDH-8は、時期決定の上でまず問題はない。一方、(3)の場合は、先に述べたDP-3、DP-4のように特殊な場合を除き、はっきりと時期決定するのが困難である。DH-4の例では、覆土上部にIb-2・3類の小片がみられるが、床面に近い所に土器片はみられない。覆土中における小片の接合関係をみると、両類は混在しており時期の新らしいIb-3類の時期に流れ込んだものといえよう。その時この住居跡は、ある程度埋没していたわけである。ところでこの住居跡の上限は、この住居跡がDH-7の近くにあるのに、Ib-1類土器が全く出土していないことから、DH-7にIb-1類が流れ込

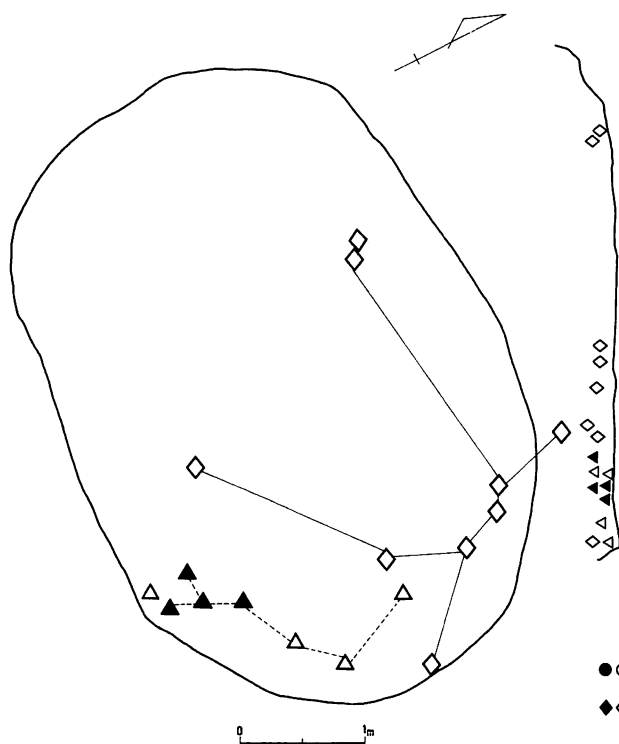


図2 : DH-2

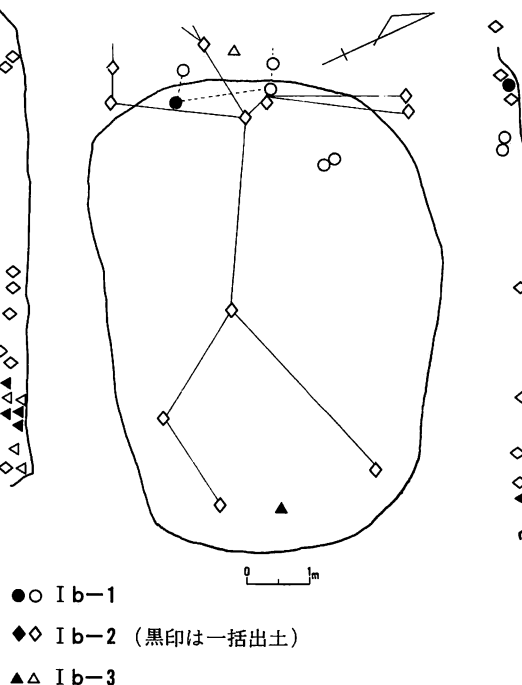


図3 : DH-3

み移動が完了した時以後のものと考えられる。DH-9については、床面近くにまでI b-2～3類の土器片が入っており、最も新しいI b-3類の時期直前と考えられる。I b-3類は、ほとんど埋まっていない状態の凹み中に入り込んだわけで、少なくともDH-4より新しいものであろう。

最も多いのは、(2)の場合である。DH-2の床面には、I b-2、3類があり(図2)、ともに接合すると大型の破片になる。ところが、同一個体の分布を追うと、I b-2類は住居跡の内部に点々とみられるだけでなく、包含層中にも見出すことができる。これに対し、I b-3類は、住居跡の南壁際に分布がまとまっている。I b-2類は北側からの流れ込み、I b-3類は住居跡に伴うものか、廃絶時直後に投棄されたものと考えられる。

DH-3(図3)の床面には、I b-1～3類の土器がみられる。I b-1類はDH-7と同一個体の破片も含め(2)または(3)の状態、I b-2は(3)、I b-3は(2)の状態出土している。同一個体の分布をみるとI b-1、2はともに住居跡内に点々とみられるだけでなく住居跡の外にも分布が広がり、流れ込みであることがはっきりする。これに対し、I b-3類は、さほど大破片ではないが分布が狭いことからみて投棄されたもの、または流れ込みであっても最もこの住居跡の廃絶期に近い頃のものとする。

同様の方法で、各遺構の時期を推定したのが次表である。

表XI-2 遺構内における遺物の出土状態

	DH-1	DH-2	DH-3	DH-4	DH-5	DH-6	DH-7	DH-8	DH-9	DP-3	DP-4
	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)
I b-3	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
I b-2	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐
I b-1	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐	┌─┐

● 推定時期

┌─┐ 床面出土状態

┌─┐ 覆土中出土状態

4. ま と め

丹念に同一個体の土器片の分布を追うことにより、D地区における土器の動きをとらえ、住居跡の時期決定における一つの資料とすることができた。もし、包含層が耕作による攪乱をうけない遺跡に応用すれば、もっと複雑な分布関係を描くことができるかもしれない。そして、(2)のような分布状態を示す土器が、人為的に投げ込まれたものが、自然の営力によるものかを見分け、人々の活動の跡を復原していくことができるものとする。